

## トピックス 『太極拳なんでも勉強会』スタート

太極拳まるごと勉強会の続編として企画しました『太極拳なんでも勉強会』は、20人の参加を得て1月14日(水)からスタートしました。第1回は「息より安いものはない」と題して、呼吸について多角的に勉強しました。逆腹式呼吸や拳勢呼吸についてさまざまなご意見が出ましたので、次回でさらに検証することといたしました。次回はさらに今回の続きとして、釈尊の呼吸法、禅の呼吸法、またその中でもとくに白隠禅師の呼吸健康法、「軟(軟)酥の法」「仰臥禅」を取り上げる予定です。

## 第16回太極拳祭に参加します

中野完二先生一門の交流の催しである「第16回太極拳祭」が、今年も、3月28日(土)に台東リバーサイドスポーツセンター体育館で開催されることとなりました。



私の担当教室からも合同で、昨年に引き続いて「鶴の会(瑞江・東大島・亀戸SC)」として12人が参加予定です。参加できる人数に限りがあるため、各教室ごとに割り当てさせていただきましたので、ご了承ください。【写真。昨年の第15回太極拳祭】

## 閑人閑話 伊勢神宮に想う

20年ぶりに伊勢神宮に行ってきました。つまり、1994年の10月に伊勢で開催された「楊名時太極拳伊勢神宮奉納全国大会」に当時の先生故豊島なつえ師範に率いられて参加して以来なのです。

1月4日に新幹線と近鉄特急を利用して宇治山田駅に着き、昼食後外宮を参拝し、域内のまがたま池のほとりにある「せんぐう館」を拝観しました。そのあと近鉄に乗って鳥羽市の海辺の温泉に泊まりました。翌5日はバスで内宮へ直行して拝観し、おはらい町・おかげ横丁を散策し、昼食と買い物を楽しんで、再び宇治山田駅から帰京しました。たいへん感じるころの多い今回の旅でした。



【写真上；五十鈴川の清流】

### 遷宮の深い意味

伊勢神宮は、天照大御神を祀る内宮と、豊受大御神を祀る外宮、そして別宮、末社など125ものお宮から成っています。内宮が先に創建され、500年ほど後に外宮が建てられたとされています。ご承知のように20年ごとにそれぞれ社殿を建て替えるいわゆる「式年遷宮」が有名です。遷宮では社殿の建て替えだけではなく神様の衣服服飾品や太刀や各種の調度品、さらには遷御の儀に使うもろもろの品など714種、1576点がすべて作り変えられるというところに大きな意味があります。最初の遷宮(持統天皇

時代・690年)からすでに1400年を経ているわけですが、連綿として、その心と技が今日まで伝承されているのですから、たしかに世界に類を見ない、すごいものだと思います。これは神道の『常若』の思想にもとづくものであるということを今回あらためて教えられました。

## 瑞穂の国

日本の神話が伝える『天孫降臨』によれば、高天原の最高神「天照大御神」から「三種の神器」と“稲穂”を授かった孫のニニギノミコトが地上に君臨して“瑞穂(みずみずしい稲穂)の国”日本が誕生したとされています。

現在伊勢神宮では年間に1500回以上の祭事が行われているようですが、もっとも重要な祭事は10月に行われる「神嘗祭」で、その年収穫された稲穂を神に捧げて感謝する祭事です。(このとき使われる祭祀具もすべて新調されるそうです。)またこのほかに、稲作に伴う季節季節の祭事も各種行われています。いわば稲作を中心とする農業、ひいては自然の恵み、に感謝する、それを忘れないための、祭祀が連綿と丁寧に行われているということです。これに対応して宮中でも同様な祭事が行われていることはご承知のとおりです。

【写真；内宮】



## 奇妙なお引越し

第10代崇神天皇の御世に疫病がはやり多くの人民が死んだため、大和の宮殿の中に、天照大御神と倭大国魂神の2神をとともにお祀りしているのが良くないのではないかということになり、「天照大御神」を笠縫邑(現桜井市三輪?)に、一方の「倭大国魂神」は穴師邑(現天理市大和神社)へ移したとされています。

しかし、奇妙なことに、第11代垂仁天皇の御世に、さらに、ここから移りたいとの天照大御神の神託が下り、あちらこちら探し求めた結果現在の伊勢の地に安住したというのです。

いわゆる国つ神である「倭大国魂神」の方はなぜか現在もどうどうと「大和」神社として祀られていて、もちろん出雲大社でも盛大に祀られているのですから、なにか、大和朝廷の出雲に対する畏怖心というのか、はれ物に触るような扱いたいへん気になります。これについては歴史学者の間でもいろいろな見解、推論があるようです。

【写真；おはらい町の賑わい】

## 天孫族はどこからきたのか？

稲作をもたらした天孫族、つまり天皇族が、どこから日本へ渡来してきたのか？あるいは、現代的表現で言えば、既存の縄文文化に対して、あとから弥生文化(稲作文化)がいつどのように日本列島へもたらされたのかというのが、古代史の主要テーマになっているようですが、いずれにしても、朝鮮半島経由、あるいは海路で、中国沿岸部から繰り返し、繰り返し、渡来してきた『倭人』が、先住の縄文系の人種と戦いと融和と混血を繰り返しながら今の日本人が形成され、日本という国家が形成されてきたというのが大方の見方



のようです。中国史の方から眺めると、秦、漢、隋、唐、などの統一王朝が崩壊するごとに、人口の激減と大量の流民が発生し、また大規模な民族移動、移住が繰り返されていたことは明らかですので、こうした余波が日本にまで及んできたことは間違いのないところです。

稲作はもちろんのこと、様々な技術と文化、そして、宗教、社会や政治の仕組みまで、そうした中国の政変のおかげでもたらされたもので？今の日本が成り立っているという事実を、あらためて考えさせられ



た、今回の神宮参拝の旅でした。

### 伊勢・鳥羽を詠う

今回の旅で創りました歌をいくつかご紹介します。

いにしへの技と心を紡ぎきて遷宮なりし宮のすがしき  
川は澄み森の深きに神おわす清澄なる気に満てる内宮  
宇治橋を渡れば聖から俗となりおはらい町に人はあふれる  
初春の波穏やかな鳥羽の海小望月いま顕ち出でにけり

## さこうべん 左顧右眄 (再開) 【第17話 漢詩に学ぶ・漢詩を楽しむ】

### 第6回 長安の春

唐王朝の首都長安は当時世界最大の大都会で、100万人以上の人口があったといわれています。つねに数万人の異国人が暮らす国際都市でもありました。

最初にご紹介する二首はいずれも長安の春の風情を詠った名歌として有名です。

#### 長楽少年行

遺却珊瑚鞭  
白馬驕不行  
章台折楊柳  
春日路傍情

#### 長楽少年行

珊瑚の鞭を遺却すれば  
白馬は驕りて行かず  
章台\*に楊柳を折れば  
路傍に春日の情あり

#### 崔国輔 (生没年不詳・726進士合格)

忘れてきたのでの意

\*柳並木と妓楼で有名な長安の繁華街

路傍に妓楼の美女がウインクしているの意

#### 少年行

五陵年少金市東  
銀鞍白馬度春風  
落花踏尽遊何処  
笑入胡姬酒肆中

#### 少年行

五陵\*<sup>1</sup>の年少金市\*<sup>2</sup>の東  
銀鞍白馬\*に春風を度る  
落花踏み尽くして何処にて遊ぶ  
笑って入る胡姫の酒肆\*の中

#### 李白

\*<sup>1</sup>郊外の高級別荘地 \*<sup>2</sup>貴人専用の繁華街  
\*ステータスシンボル

\*しゅし；青い目の美人のいる酒場

この詩が詠まれたのはちょうど玄宗皇帝の君臨する、最も華やかな盛唐時代です。どちらも親の威光と財力で、我が物顔に長安の春を満喫している、若者を詠んだ詩です。

白馬はもっとも高価で、身分の高い人でないと乗れない馬ですし、珊瑚の鞭もこれまた贅沢極まる品です。第二句では、高級別荘地の五陵に住んでいて、白馬には銀の鞍が置いてあるというからこれまたすごいものです。いずれも行く先はペルシャの美女の侍る高級酒場か妓楼のようです。二人の作者はやや羨望と皮肉も込めて詠っているのではないのでしょうか。

さしずめ、今の中国の“太子党”の若者たちがジャガーや、ベンツを駆って、遊び歩いているのと同じようですね。

#### 登科後

昔日<sup>あくせく</sup>齷齪不足誇  
今朝放蕩思無涯  
春風得意馬蹄疾  
一日看尽長安花

#### 登科後 (科挙合格の意)

昔日の<sup>あくせく</sup>齷齪\*は誇るに足らず  
今朝放蕩\*として思い涯無し  
春風意を得て馬蹄疾し  
一日看尽す長安の花

#### 孟郊 (751~841)

\*試験勉強で汲々としていたことを指す

\* (合格して) 解放された気持ち  
得意満面で馬を乗りまわすさま

この詩は47歳にしてやっと科挙に合格した作者孟郊自身の喜びを詠ったものです。当時は科挙の試験に合格して「進士」となることはたいへんなことだったようで、合格発表の当日は無礼講でどんな名家を訪

れても歓待してくれました。ときに旧暦3月、牡丹の花も満開です。

ところで中国の詩人たちのほとんどは、(とくに唐時代は) 科挙の合格者です。当時の科挙で一番重視されていたのが詩文の成績だったからです、当然と言えば当然です。官僚は詩人であり、詩人は官僚であったのです。無頼の徒のような暮らしの中でその詩才が認められて玄宗皇帝に召されたという李白は例外中の例外です。科挙にチャレンジしたがついに合格しなかったのが李白の親友の杜甫。その杜甫が安祿山の乱で捕まり、長安で幽閉中に作ったのが、名詩「春望」です。757年3月、杜甫46歳の作です。

### 春望

国破山河在  
城春草木深  
感時花濺淚  
恨別鳥驚心  
烽火連三月  
家書抵萬金  
白頭搔更短

### 春望

国破れて山河在り  
城春にして草木深し  
時に感じては花にも涙を濺ぎ  
別れを恨んでは鳥にも心を驚かす  
烽火 三月に連なり  
家書\* 万金に抵る \*故郷の家族からの便り  
白頭 搔けば更に短く

渾欲不勝簪

渾<sup>すべ</sup>て簪<sup>しん</sup>\*に勝<sup>た</sup>えざらんと欲す \*かんざし、冠などを止めるヘアピン

【写真；当時の華やぎを彷彿とさせる西安・華清池でのパフォーマンス 2004年11月撮影】



## 旅をうたい拳を詠む

### 「NHK短歌大会」までも入選と佳作どまり

平成25年度NHK短歌大会に昨年秋応募しておいたところ、そのうち、4首が「入選」し、さらに1首が「佳作」に入りました。以下にご紹介しますが、今年も「特選」には至りませんでした。来年またチャレンジします。

しずしずと教祖のごとく立ち出でて

夏川りみは歌で説くなり

藤の花そここに咲く路行けば

春雨にけぶるミレーのアトリエ

暁闇に参道歩めばパンを焼く

匂いはやするモンサンミッシェル



【写真上；ミレーのアトリエのあるバルビゾン村】

木犀<sup>か</sup>の香の入りくればまたさらに気の和みゆく太極拳教室 【佳作】